

土佐のわらべ

第352号 《第374回（2010. 9. 9） 子どもの本の読書会記録》 参加者7名

『ふたりのロッテ』 エーリヒ・ケストナー／作 高橋健二／訳 岩波書店

ビュールゼー湖のほとりのゼービュール村にある子どもの家で、9つになる女の子—ミュンヘン育ちのロッテとウィーン育ちのルイーゼが出会い、二人はふたごであることがわかる。

休暇が終わり、互いに父母に会いたい気持ちと冒険心で入れ替わり、両親が一緒になる作戦を考え実行に移した。父の所へ行ったロッテは、父には気づかれなかったが犬には気づかれていた。そして、父には結婚したい女性がいたが、ロッテが「神経熱」にかかったので、それどころではなくなった。

ルイーゼと母がミュンヘンから看病に来て病気がなおり両親はもう一回結婚する事になり、夢のようなすばらしい幸福が訪れる。

この本はセピア色で時代を感じさせるけれど、さし絵はおもしろく、内容は現在でも通用する。私は日本にも「子どもの家」があれば、子育て中の親にとっていい意味での息抜きが出来るのと思った。また、ロッテの行動力、勇気には感心させられた。画家のガベーレさんが自分がかつて子どもであったことを忘れてはいなかったように、私も忘れてはいけないと思った。子どもにとって

両親と暮らせることは何にも変えがたいものだと思う。いい本は時代をへだてても、心に感動を与えてくれる。

この本は子どもの小説としてワルター・トリヤーの挿絵入りで1949年にベルリンで出版され、1950年にベルリンで映画となり封切られている。また、ケストナーは1960年に国際アンデルセン賞をおくられている。

ケストナーは「率直さを愛し真実を貴ぶ」ことを信条として、子どもだからといってごまかさない。

読書会では、「二人の子どもの素直さ、喜びを相手に伝える子どもらしさが私達を魅きつける。」といった感想や、「大人の身勝手が随所に出てくるけれど、いい本を読んだという満足感があった。」という感想があった。

(ケストナーの本)

「点子ちゃんとアントン」「エーミールと探偵たち」「飛ぶ教室」「動物会議」・・・

是非、読んでほしい本です。

(Y. A)